

荒木恵作 「いじめ」

<前編> 生意気なやつ

- 奥田桂子 えー、では今回はこの意見で行いたいと思います。日程のことなんですが、後日改めて決めるというのでいいでしょうか？ 何か意見のある人は手を挙げてください。
- 川井留美子 はーい！
- 生徒 A (小声で) またあいつだよ。
- 生徒 B ほんと、でしゃばりなんだよな。
- 留美子 やっぱり日程は早めに決めたほうがいいと思います。前から行く日をチェックしとかないと、行けない人が出てくるから。
- 生徒 A はーい、そんなのずっと先のことなんだから、今決めなかったっていいと思います。
- 留美子 でも予定のある人だっているかもしれないから、ちゃんと決めておくべきだと思います。
- 生徒 B (かぶせて) そんなの今決めたって後で決めたって同じじゃないか。
- 留美子 そんなことないわ。だって...。
- 桂子モノローグ あーあ、また始まった。学級会になるといつもこうなんだから。
- 桂子ナレーション わたし、学級委員長をやっている奥田桂子、青春高校 1 年生。みんなには“ケイ”って呼ばれてるんだ。そうそう今、学級会でやってたのは、今度の休みの日、皆でハイキングに行こうって案が出て、その場所を決めてたところ。場所は何とか決まったけど、日程が...。今言い争っている女の子は、川井留美子。でしゃばりってというか、積極的すぎるのが原因で、皆に嫌われてるんだ。
- 友達 A ケイ！ ちょっと来てよ。
- 桂子 何？
- 友達 A 留美子のことなんだけど、あいつ最近ますます生意気だと思わない？
- 桂子 そうかなあ。
- 友達 B それで今日のこともあったじゃん。だから明日からシカトするからね。
- 桂子 え、明日から？
- 友達 A そうだよ。だって、早いほうがいいじゃん。どうせあの性格が直るわけないんだし。
- 桂子 でも... ヤバいんじゃないかな。
- 友達 B ケイ！ もしかしてやるのイヤなんじゃない？
- 桂子 そんなことないけど...。
- 友達 B じゃあ明日からね。バイバイ！

ナレーション 結局わたしはオーケーしてしまった。本当にこんなことしちゃっていいのかな。なんかすごく後味悪いって感じ。そして次の日 。

留美子 ねえ、次の時間さぁ、どこで…。

友達 A (かぶせて)早く行こうよぉ、遅れちゃうよ！

留美子 ねえ、奥田さん、次の物理の時間…。

友達 B (かぶせる)ケイ、早く行こうってば！

ナレーション わたしはせかす友達の声に引っ張られて、行ってしまった。背中で留美子が悲しい顔をしているのが分かる。でもわたしは…。それから、毎日留美子へのシカトは続いた。皆は、シカトだけでは収まらず、ほかの嫌がらせもするようになった。

留美子 あれ？ 教科書がない。どうしたんだろう。持ってきたはずなのに…。ねえ、わたしの教科書知らない？

友達 A わたしたちが知ってるわけないでしょ。まさかわたしたちが取ったとでも思ってるんじゃないでしょうね。

留美子 そんなことは思ってないけど…。

友達 B だったらわたしたちに聞くのは間違いってやつね。

桂子 ねえ、やっぱヤバイよ、こういうの。

友達 A ケイ、そんなにイヤだったら抜けてもいいんだよ。そんなにイヤだったらね。

桂子 そんな。わたしはただこれ以上やると留美子がかawaiiそうだって言いたいだけだよ。

友達 A へえー、ケイって留美子の味方だったんだ。

桂子 別にそういうわけじゃないよ。

友達 B まあそんなこと、今は関係ないって。

友達 A そうだよ！ 見てよ、あの留美子の困った顔。

友達 B 留美子いじめるのって快感！ なんか病み付きになりそう。

友達 A,B (笑い)

ナレーション わたしはどんどん泥沼にはまっていく気がしていた。いくらあがいても出られない泥沼…。

友達 A (小声で)ねえ、今日はあれにしない？

友達 B そうだね、グッドアイデア。あれって、まだやったことないもんね。

桂子モノローグ また何かやりだす気だ。今度は何考えてんだろ。

生徒 A 見たかよ、あいつ。

生徒 B ああ。今日はちょっとオシャレしてんじゃないか。

生徒 A どうにもなんねえのによぉ。

生徒 B 救いようがないってか？(笑い)

ナレーション あっちでもこっちでも留美子のこと言ってる。いつの間にか、クラス全体に広が

っていた。もう手の付けようがないって感じだった。その日、わたしは担任の新井先生に呼ばれた。

- 新井先生 どうだ奥田。クラス内で何か変わったことはないか？
- 桂子 別にありません。
- 新井先生 そうか。ならいいんだが、何かあったときには先生に言ってくれ。
- ナレーション わたしは思い足取りで職員室を出た。
- モノローグ 先生はなんであんなこと聞いたんだろう？ ひょっとして留美子のこと知ってるのかな？
- ナレーション 思い切って言っちゃおうと、のどまで出掛かったけど言えなかった。
- モノローグ わたしにはできない！ 言ったら、言ったら、わたしがシカトされる！
- ナレーション それからも留美子いじめはますますエスカレートした。
- 留美子 あれ？ ここに置いてあった傘がない。ねえ奥田さん、一緒に捜してくれない？
- 友達 A ケイ！ そんなの捜すことないよ。それより早く帰ろうよ。
- 友達 B そうだよ。わたし今日、留守番しなきゃいけないんだから早く。
- 友達 A じゃあ留美子お先に！
- ナレーション わたしは誘われるまま、友達と一緒に帰ってしまった。「早く帰ろう！」と言っていた友達も、学校を出たあとはベチャクチャおしゃべりをしながら本屋に寄り道していた。絶対留美子の傘を隠したのは友達だ！ と思った。案の定、留美子の傘はゴミ箱の中に捨ててあった。そういうのが続いた日の帰り道はやりきれない気持ちでいっぱいだった。その時、わたしはキリスト教の教会の前を通った。
- (音楽) (“慈しみ深き”)
- ナレーション 時刻を告げるチャイム音楽が流れていた。
- モノローグ ああ、懐かしいなあ。えっとこの曲は…。あ、そうそう、「慈しみ深き」だったっけ。そう言えばわたしも、小さいころ、教会学校なんてところに行ってたなあ。ずいぶんごぶさただけど。
- (効果音) (ドアを開ける音)
- 桂子 ただいま。
- 母 お帰り。ご飯できてるからね。
- 桂子 やったー。もうおなかペコペコだったんだ。
- 母 ところで桂子、最近何かあったの？
- 桂子 何よ、突然。
- 母 何か考え込んでるみたいだったから。
- 桂子 そんなことないよ！ 気のせいじゃん？
- 母 そうかしら…。うん、そうね。まさか桂子に限って考え事なんてね。

先生 そうなんだ。すぐ近くの総合病院で、手当てを受けているそうだ。

桂子 それで、留美子は大丈夫だったんですか？

先生 一命は取り留めたみたいだな。だが重症だと川井のお母さんが言っていたんだ。

(効果音) (救急車のサイレン)

ナレーション 大変なことになった。わたしは、クラスの代表ということで、すぐ先生と一緒にタクシーで病院に向かった。

モノローグ 留美子... ごめん。そんなに思い詰めていたなんて。わたし、“いけない、いけない”と思いながら、止められなくて、勇気がなくて、ごめん。留美子、お願い、死なないで。死なないで！ 神様、助けて！

ナレーション 思わずわたしの口から、神を求める叫びが突いて出た。目の前が、周りが真っ暗になって、わたしはその時、本当に長い眠りから覚めたように、ただ神様を求めている。

<後編> 真実の友

ナレーション わたし、奥田桂子。青春高校1年生。わたしは学級委員長をやってるんだけど、このクラスでいじめが起きて、その対象にされた川井留美子が学校に来なくなってしまった。でもこんな大変なことが起きるとは思わなかった。

先生 もしもし、新井ですが。ああ、川井のお母さんですか。これはどうも。え、なんだって、川井が?! (間)

モノローグ 留美子が自殺！ わたしたちのせいで...

ナレーション 目の前が真っ暗になった。何がなんだか分からなくなってしまった状態で、わたしたちは病院に着いた。

(効果音) (病室のドアの開く音)

先生 失礼します。

留美子の母 あ、先生。留美子が、留美子が...(泣き崩れる)

先生 お母さん、しっかりしてください。それで状態はどうなんですか、先生？

医師 うーむ。絶対安静ですな。かなり衰弱しているようですから。

先生 そうですか。

医師 とにかく、しばらくの間入院してもらおう予定です。ではわたしはこれで。

看護婦 お大事に。

先生 ありがとうございます。(母親に)お母さん、川井はなぜこんなことをしたんですか？

母 最近、留美子の様子がおかしかったんです。突然、学校にも行きたくないと言い出しますし、何かあったのか聞いても答えないんですよ。おかしいと思っていた矢先に...。今朝方、なかなか起きてこないんで、部屋まで起こしに行った

んです。そうしたら、ベッドの上で留美子がぐったりなっていて、そばに睡眠薬の瓶が落ちてたんです。どうしてこんなバカなことを...(泣く)

先生 そうだったんですか。奥田、川井が学校に来たくなかった理由を知ってるか？

桂子 ...いいえ。

先生 やっぱり何かあったんだろ、クラス内で？

桂子 そんなことはないと思います。

先生 じゃあ、なぜこんなことが起きたんだ？ 何か学校であったからじゃないのか？

桂子 そんなこと分かりません。分からないって言ってるでしょ！

ナレーション わたしは、いら立ちがいっぱい詰まったことばを残して飛び出してしまった。

モノローグ わたしは、留美子の自殺の原因を知っている。でも言えない。言ったらわたしも...。もうイヤだ！ 先生からも、留美子のお母さんからも、そして留美子からも逃げたい。でもこの苦しさからは、逃げても逃げても逃げ切れない。これからわたしはどうしたらいいんだろ。

ナレーション 学校に戻ると、留美子のことはクラス中に広がっていた。

友達 A あ、ケイ！ 行ってきたの、病院？

生徒 A 自殺だって？ 思い切ったことするよな、留美子も。

友達 B でもバッカみたいじゃない？ あれくらいで自殺するなんて。ちょっとおつむが足りないのよ、きっと。

桂子 ...やっぱりわたしたちのせいよね。

友達 A 何言ってんのよ、ケイ！ わたしたちは悪くないわよ。

生徒 B そうだよ！ だってあいつが普通にしたりゃ、でしゃばらなきゃ、こんなことしなくて済んだんだよ。

友達 A そうだよ、ケイ！ わたしたちは悪くないよ。あっちが原因作ったんだもん。わたしたちが悪人呼ばわりされたんじゃたまったもんじゃないよ！ そうだよね、みんな？

全員 (口々に)「そうだよ！」「そうよね」など。

モノローグ みんなは自分が悪いと思っていない。すべて留美子が悪いんだと言う。でも本当にそうなの？ 本当にわたしたちは悪くないの？ 違う、そんなことない！ わたしがやってしまったんだ。このわたしが...

ナレーション 絶望した。もう何もやりたくない。このままどこか遠くへ行ってしまうと思っていた。そんな時、電柱に張られた 1 枚のポスターが目にとまった。それは教会の案内だった。

モノローグ 「真実の友キリスト。ヤングのためのフォークとメッセージの集い」が...

ナレーション わたしはそのポスターのことばに妙に引かれて、本当に何年ぶりかで教会へ

と足を向けた。「真実の友キリスト」。そう、今のわたしはだれか本当の友に懇めてほしい。そして助けてほしい、という気持ちでいっぱいだった。

- (音楽) (ゴスペルフォーク)
- ナレーション 教会に着くと賛美歌が流れていた。
- 受付 ようこそいらっしゃいました。さあ、どうぞ。
- ナレーション わたしは賛美歌と聖書を渡されて、会堂へと入っていった。会堂の真ん中には、大きな十字架があった。
- 牧師 今日は、わたしたちの真実の友、イエス・キリストをぜひみんなに知っていただきたいと思います。みんなはイエスという方を知ってるかな？
- ナレーション 牧師先生の言葉は、まるでわたしに語りかけるように心の中に入ってきた。
- 牧師 さあ聖書を開いてみましょう。ヨハネの福音書 15 章 13 節。ページ数は 194 ページです。では一緒に声を出して読んでみようか。
- 桂子 「人がその友のために命を捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」
- 牧師 みんなは「走れメロス」の話、聞いたことあるかな？ そう、友との約束を守って、身代わりに死刑になろうとする親友を救うために、命がけで戻ってくる若者、この二人の友情物語だよ。みんなはどうかな。本当に君のためを思ってくれる友はあるかな？ そしてあなたは、だれかの本当の友になっているかな？
- (FO)
- ナレーション 思わずドキリとした。それから牧師先生は、聖書からイエス様の話をしてくれた。人を赦せない心。憎む心。自分のさまざまな心の不満やいら立ちを、人をいじめることで満足させようとする醜い思い上がった心。そしてそれを知りながら止めることのできない弱い心。 そんな人間の罪をイエス様は全部黙って背負い、十字架で死んでくださった。命を捨てて、イエス様はこんなわたしの友になってくださったのだ…。
- モノローグ 神様、助けてください！ こんなわたしを赦してください。わたしはいろいろな悪いことをしてきました。そして友達を自殺にまで追い込んでしまったんです。イエス様、お願いします。こんな醜い心のわたしをお助けください！
- ナレーション わたしは心の中で叫んでいた。もう頼れるのはこのお方しかいないと思った。涙があとからあとから流れてきた。その時、急に体中に重くのしかかっていたものがスッとなくなった気がした。そして苦しみでいっぱいだった心の中に、なんとも言えない安らぎが広がっていった。こんなわたしでも神様は見捨てなかった。救ってくださり、愛してくださったと本気で思った。
- 翌週の月曜日、学校でのことだった。
- 先生 みんな、川井のことは知っていると思う。そこで、お見舞いに行ったらどうかと思うんだ。だれか行く者はいないか？

生徒 (口々に)「えー、どうしようか」「ヤだよ」等々。

桂子 わたしが行きます。

先生 そうか。よし、じゃあ奥田に決定だ。みんな、いいな？

生徒 はーい！

ナレーション わたしは無意識のうちに手を挙げてしまった。いや、挙げたのではなく、挙げさせられたという感じだった。何か暖かい別の手が、そっとわたしの手を上に挙げたのだった。

(効果音) (病室のドアのノック音)

桂子 失礼します。

母 よくいらしてくださったわ。留美子のお友達かしら？

桂子 はい、同じクラスの奥田桂子です。留美子さん、どうですか？

母 あまり回復していないんですよ。相手が言ってる言葉は分かるみたいなんですけど、あまり反応しないんです。あ、ちょうどよかった。わたし、用があるのでちょっと行ってきますから、留美子のお相手をしてくれる？ じゃあごゆっくり。

ナレーション わたしは、ベッドに横たわった留美子と二人きりになった。“謝るのはこの時しかない！”とわたしは思い、ベッドの前に立った。

桂子 留美子、わたしのこと分かる？ ケイよ。奥田桂子。今日はあなたのお見舞いに来たの。あなたはわたしのことを赦さないかもしれない。そうよね、あんなひどいことしたんだもん。ごめんなさい。本当にごめんなさい。わたしが悪かった。最初にあなたのことを持ちかけられた時、断っておけばよかった。でもわたしにはできなかったの。だって留美子をハブにしなければ、わたしがハブにされちゃうから。怖かったの。恐ろしかったのよ。でもわたしが間違っていた。自分のために友達を犠牲にしたんだもん。最低だよ、こんなのって。本当にごめん。ごめんね。

留美子 ...い、いいよ、もう。本当の...こと、話してくれて...ありがとう。

桂子 留美子...。

ナレーション わたしのほおに熱いものが伝わってきた。わたしは赦された。赦されたんだ！あんなひどいことをしたのに、留美子は赦してくれた。胸がいっぱいになったわたしは、心から神様に感謝した。

モノローグ 神様はわたしに謝る勇気を与えてくれた。イエス様は、こんなわたしをも赦してくれた。あしたクラスに戻ったら、先生やみんなに、思い切って「こんなのいけない」って話そう。なんて言われるか分からない。正直言って怖い。でも、二度と同じ過ちはしたくない。留美子がかも戻ってこられたら、わたしは、わたしだけは、どんな目に遭っても留美子の友達でいよう。イエス様が、わたしの“真実の友”になってくれたんだから。

ナレーション 病室の窓から手を振っている留美子を見上げながら、わたしは何度も心の中

で、そう言い聞かせていた。

< 完 >